Ｎａｍｅ～戦火の中の呼び声～

璃玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎａｍｅ～戦火の中の呼び声～

【Ｎコード】
Ｎ５７４０Ａ

【作者名】
璃玖

【あらすじ】
戦後の平和な世界の中で生きる少女は、突然記憶を失ってしまった。そんな時に出会ったのは、第二次世界大戦中の激しい戦火の中に生きる少年だった。戦争を通して知る真実、そして失われた記憶の謎。二人が出逢ったその瞬間から、運命の歯車は回り始めていた。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ．（前書き）

＊はじめに＊

この小説は、戦争を知らない現代の人々に少しでも戦争の悲惨さをわかってもらうため、また自分自身が戦争の恐ろしさをよく理解していくために書いたものです。
終戦から６０年が経った今、平和への意識が薄れてきている事実を認めないわけにはいきません。

この小説を通してもう一度、平和について考え直してみていただければと思います。

Prologue.

〔Ｐｒｏｌｏｇｕｅ．〕

太陽の日差しが強く照りつける暑い夏の日、私は一人で歩いていた。
何をするでもなく、ただ橋の上から街を見据える。普通の街となんら変わりない。家が立ち並び、高いビルがある、そんな景色。
「…何で…」
震える手には古いセーラー服、そして、頬を濡らす涙。それが何故流れているのか、何故止まらないのか――…
橋の上で一人、目を閉じる。
「…何で…？…いや…だ――…」
掠れる声、遠退く意識。

次にこの目を開いた時、この涙の理由が、わかるのかな――……

意識はゆっくりと、深い闇の中へと堕ちていった。

〔Ｐｒｏｌｏｇｕｅ．ＥＮＤ．〕

Scene. 1

〔 Scene. 1 〕

「…お前、そんなところで何やっとる！？空襲だぞ！！」

突然のその声に、私は我にかえった。反射的に振り返ると、少年が息を切らせながらこちらを見つめていた。

「えっ…空襲って…」

「空襲は空襲じゃろが…こんな橋の上なんかに突っ立っておったら、撃たれるぞ！」

声の主である少年に手を掴まれ、引っ張っていかれる。突然の事で頭の中がパニック状態。辺りの様子を落ち着いて見渡すこともできないまま、私はまともに歩くことさえ忘れていた。

一体、ここはどこなのだろう……？

――ブロロロ…

「…！？」

重々しい機械音が聞こえ、私は空を見上げる。

「…ここに、この広島に戦機がくるなんて…めずらしいことなんじゃ」

低く轟くような音を立てて空を飛ぶ小型飛行機を仰ぎ見ながら、

少年は舌打ちした。

（――――？……）

私にはまだ、状況が把握できなかった。

†

少年に連れられ辿り着いたのは、山の急斜面に掘られた大きな横穴。外からでは全く中の様子が窺えない。

「…お前は中へ入っとれ」

少年に背中を押され、ほとんど躓きながら穴の中へと入った。

穴の中は一筋の光もなく、そこはまるで盲目の世界。やっとのことで暗闇に目が慣れてきてとき、私は目を丸くした。薄暗く陰気な雰囲気の漂うその穴の中には、まるで押し込まれているように大人から小さな赤ん坊に至るまで沢山の人々がいた。

「…ここ、は…？」

発せられた言葉は、洞窟内の闇に溶けこむようにして消え入る。生気を宿さない、大人の眼、子どもの瞳。表情の無いたくさんの人々を前にして、私の体はまるで金縛りに遭ってしまったかのように動かなかった。

さきほどまで空に轟いていた戦機の音も次第に遠退いていき、やがて聞こえなくなった。

「…行ったようじゃな」

先ほどの少年は外の様子を確認したのち、安堵の息をついた。額に滲んだ汗を手の甲で拭いながら、穴の中にいる人々を振り返った。

「みんな、もう平気じゃ。こんな暑っ苦しいとこ、はよ出よ、出よ」

少年が心底嫌だというような顔をしながらそんなことを言うものだから、私は思わず吹き出してしまった。

「何や笑うなんて、ひどいヤツじゃなぁ」

そう言う少年も笑顔である。

「みんな、気ィつけて戻れよ」

「ありがとねぇ、あんたも気ィつけてな」

穴を出ていく人々は皆、先程と比べて幾分か表情に明るさが戻っていた。一人一人に言葉をかけながら笑顔を向ける少年の強さと優しさに、私は心が温かくなるのを感じた。

「…さっきはありがと…。私、少しびっくりしちゃって」

「何じゃ、お前…空襲を知らんなんて珍しいヤツじゃなぁ。どっから来たん？名前は？」

少年の質問に口を開き答えようとするが、肝心の言葉が出ない。

「何じゃ、黙って。どうしたんじゃ？」

おもむろに開いた私の口からは、本来あるはずのない答えが出た。

「……わからない」

「…は？」

私の発言に、少年は表情を曇らせた。

「何でだろ…私、自分が誰なのかも、家族の事も…わからない」

「一体どういうことじゃ？自分の名前がわからんて…」

「ごめんなさい。でも本当に、わからない…。気がついたら、あの橋の上であなたに呼ばれて…」

自分でも信じられない。しかし実際、心の中までカラッポだった。自分自身、何が起こったのか教えてもらいたい。

「…なぁ、その手に持ってるの、それは何なん？」

少年に指摘され、自分の手を見てみる。私はこのとき初めて、自分が布らしき何かを握りしめていたことに気付いた。

「何だろう、これ…」

持っていた布を両手で広げてみると、それは古びたセーラー服だった。そしてそれを見た瞬間、ふと思った。

「…何故だかわからないけど…大切な物のような、そんな気がする」

少年が考え込み、ぽつりと言った。

「記憶がほんの少し、これに反応したんじゃな。きっと」

「うん…そんな気がする」

「…それにしてもだな、お前、戦争中でその格好っていうのはいかんじゃろ。」

少年が突然話題を変えたので、少しばかり拍子抜けした。しかし

服装をよく見てみると、自分自身で驚いてしまった。なんと、真っ黒の喪服を着ていたのだ。正装のため、動きやすさや通気性の確保が全くできていない服装だった。
記憶がないとはいえ、自分はなんと縁起の悪い格好をしているのだろう。さすがにこれでは、心地悪い。

「なんかお前の格好、真っ黒で縁起悪いな。そのうえ暑苦しいじゃろ。なんなら、それ着たらええじゃろが」

無遠慮にズバズバと言い放つ少年だったが、言われていることが真実であるために何も言えず。黙っている私に向かって、少年はセーラー服を指差しながら言った。

「…えっ…コレ…？」
「…そんな格好しとったら、動きにくくて困るぞ？」
「…うん…そうだね。わかった」

少年の言うことには、妙な説得力があった。何よりも不可思議なのは、気付けば私の中に芽生えていた、少年に対する信頼という名の感情。私は少年の意見を聞き入れ、着替えるために物陰へと入った。
着替えを済ませると、待っていてくれた少年のもとに戻った。

「よしよし。さっきの格好より動きやすそうやし、涼しそうじゃ」

少年は満足気に言い、私は小さく微笑んだ。

（私、いつもこれを着てたのかな。これ、大切な物のような気がしたし……）

身につけたセーラー服を眺めながら、私は無意識の内にそんなことを考える。

「お前、“春美”って名前なんか？」
「…え？」
「名札に書いとる。“春美”って」

セーラー服の胸元の布切れに大きく書かれた文字を、少年はまじまじと見つめる。

「本当だ…」
「きっとそうじゃ、書いてあるんやもん。お前の名前は“春美”じゃ」
「…そうなのかな」

私は少年と顔を見合わせ、微笑んだ。

「ちょっと来い、春美。会わせたいヤツがおるんじゃ」
「えっ」

少年は私の手を掴み、有無を言わせる間もなく歩き出した。
…と思ったのだが、いきなり急停止した。
お陰で少年の背中に顔面をまともにぶつけた。

「…忘れとった、オレの名前。オレの名前は、榊（サカキ）　愁（シュウ）。覚えたってな」

ニカッと歯を見せて笑う少年、愁。

「……」

私は涙目になりながらぶつけた鼻を摩り、原因となった少年に鋭い視線を投げつけてやる。しかし当の本人は全く気付いておらず、私の手を掴んだまま、どこか楽しげに歩みを進めるだけだった。

〔Ｓｃｅｎｅ．１　ＥＮＤ〕

scene. 2

〔Scene. 2〕

どこか懐かしい雰囲気の漂う町並みに、たくさんの家が佇んでいる。

「…あっ、愁…！」

一人の少女がこちらに向かって小走りでやってきた。セーラー服を着てもんぺをはいた、同じくらいの歳頃だと思われる女の子。

「愁！さっきアメリカの戦機が飛んで来てん…大丈夫だった？」

「そんなことより、ちょっと聞け！」

心配そうな少女をよそに、愁は笑いながら言った。

「そんなこと、って何！？人が心配しとるのに…」

私は愁に突然背中を押され、頬を膨らましている少女の前に立つ形となった。

「コイツ、【春美】というんじゃと」

「…えっ？」

少女が驚き、目を丸くした。しかしすぐに、にっこりと顔を綻ばせた。

「本当？偶然ねぇ、私と同じ！私も春美という名前なんよ、嘉納春美（カノウハルミ）。愁の幼なじみなんよ」
「おもしろいなぁ。同じ名前のヤツがおるなんて。なぁ、ハル」
「ほんと、そうね。よろしくね春美ちゃん」

少女が手を差し出してきた。

「…こちらこそ、よろしく」

私はその手を、そっと握り返した。

†

「――えっ？じゃあ、今までの記憶が何にもないん？」

私が今置かれている状況の説明をすると、ハルは心底驚いたように目を見開いた。

「うん…。自分の名前も、家族の事も。今わかるのは、このセーラー服に“春美”って書いてあったから…それが私の名前なのかな、って事だけ」

苦笑して答える私を見て、ハルは言い聞かせるように語りかけてきた。

「本当に辛い時は、そんな風に無理に笑わんでええ。本当に笑いたい時に笑ったらええんよ」

無意識のうちに伏せていた瞳を上げ、ハルを見つめ返す。ハルの笑みは、何故か私の心を落ち着かせた。

「私、春美ちゃんの記憶取り戻すの、手伝う」
「え…、だって、戻るかもわからないのに？」
「諦めたらいかん、奇跡が起こるかもしれんもん。そうやろ？」
「……」

私は思った。ハルは、強い心と信念を持っている。
――その瞳に、他の誰かの瞳が重なって見えたのは、気のせいだろうか。

「…ありがとう、ハルちゃん。私も頑張る。早く思い出せるように」
「よし、その意気や！頑張ろう、春美ちゃん。何でも力になるからな」

ハルと笑みを交わしたちょうどその時、愁の腕が伸びてきてハルと私を引き剥がすように離れさせた。

「オレの存在忘れとるんとちがうやろな。二人だけで盛り上がるなんて卑怯じゃろ、ちゃんと混ぜてもらうからな。オレだって、春美のために力になってやる！」

今まで黙っていたせいで鬱憤が溜まっていたのか、一息でまくしたてた。

「そう言ってくれて、私も心強いよ。ありがとう」
「春美、信じたらいかんよ。愁はいつも勢いばっかで、役に立たないもん」
「何やてハル、もっぺん言うてみい！」

ハルの冗談に、ムキになる愁。止めるべきか否か迷っていると、

背後から声が掛かった。

「何だ、また痴話喧嘩か？」

突然の声に驚いて振り返ると、そこには一人の青年が立っていた。身長が高く、私やハルよりも頭一つ分大きい。見知らぬ人の登場にわずかながらも身体を強ばらせる。

「…なんだ、秋兄か」

愁が表情一つ変えずに言い、私は愁の知り合いかと心中で安堵のため息をついた。

「なんだとは何じゃ、このクソガキ」

あまりにも素っ気ない愁の物言いに、秋兄と呼ばれたその青年は不満そうな顔をして言った。しかし当の本人はどこ吹く風、無視を決め込んでいた。

「…まったく、弟の分際で生意気なヤツじゃな」

「えっ、弟？」

「コラ春美、いくらなんでも驚きすぎじゃろ」

私は思わず声を上げてしまい、愁に指摘されて慌てて口を手で押さえながらも、視線はその青年に釘づけだった。青年と愁とを交互に見比べる。

よく見ると、顔立ちがそっくりだった。

「そりゃ、驚くよね。兄弟ゆうても、性格が全くと言っていいくらい違うんやもん。秋兄は愁と違って、落ち着いて行動できる大人や

からなぁ」

ハルが茶化すと、愁がムッとした表情でハルに詰め寄っていく。

「何じゃそれ、まるでオレが落ち着きないみたいやないか」

愁が抗議すると、ハルは腰に手を当てながら表情一つ変えずに言い放った。

「本当のことやないの」

悪戯っぽく舌を出したハルの言葉に、図星だったのか、愁は頬をぴくりと痙攣させた。

「一本取られたな、愁」

「…ちぇっ」

愁は悔しそうに舌打ちした。

「…ぷっ…、はは…」

子供っぽい愁の仕草に、私は堪えきれなくなって吹き出した。愁とハルのやり取りはまるで、夫婦漫才のようである。

「コラそこ、笑うなっ」

「…ご、ごめん…」

謝りながらも、しばらく笑いが止まらなかった。

「…ところで、この子は?見かけない顔じゃが」

「私らの新しい友達。私と同じ、春美って名前なんよ」

秋兄の問いにハルが答えると、秋兄の顔に笑みが広がる。

「へぇ、そいつは面白い偶然やなぁ！！…俺はそこのクソガキ、愁の兄の榊（サカキ）　秋一（アキカズ）じゃ。秋兄って呼んでな」

「え、あ…はい！よろしくお願いします」

テンポ良く進んでいく会話に若干乗り遅れていたせいか、慌てふためきながら答えると、秋兄に笑い飛ばされた。

「そんなに怖がることないじゃろが。誰も獲って食いやせんぞ。な？」

初対面の人とでも、わずかな壁をも感じさせない。それまで感じていた緊張感が、一気に消え去っていく。

「それと、敬語もよせ。ここらへんが痒くなる」

そう言って秋兄は、背中をボリボリと掻いた。大らかでユーモアのある人柄は、愁にそっくりである。

「…はい。ありがとうございます」

「おいおい、それが敬語やって」

「えっ、…あ！」

早速間違えてしまった。恥ずかしくて顔が熱くなるのを感じる。ペースはすっかり、秋兄に持っていかれていた。

「ははは っ！！この子、中々じゃなぁ」

「まぁな。結構面白いヤツじゃな、春美は」

愁が踏ん反り返ってそんなことを言うものだから、私は反撃とばかりに言い返してみる。

「愁こそ、その変な性格は誰にも真似できないよね」

「へえ、お前、言うやないかい」

「…愁ほどおかしなことは言えないけど。ん？妙なこと、かなぁ」

ちょっとしたからかいのはずが真剣に考え込んでいる私を見て、ハルと秋兄は腹を抱えて笑い転げてしまった。

†

いつの間にか時間がたったのか、細く長い影が地面に落ちていた。

「あれ、もう夕方になってしまったみたいやね」

オレンジ色に輝く夕日を見ながら、ハルは言った。

「…春美、お前どうするん？記憶戻らん限り、家とかもわからんじゃろ」

愁の言葉で、自分の置かれた状況の深刻さに気付かされる。今の私には、帰る家があるのかさえもわからない。もしかしたら、ないのかも――。

「どう言うことじゃ、愁。記憶がないって？」

黙って俯いていた私の隣で、秋兄が眉を顰めて愁に尋ねた。が、

愁は秋兄の質問を聞き流そうとする。

「その話は後じゃ。まずは春美の今後のこと、考えんと」

――初めて会ったときも、愁はこんな風に真剣な顔付きをしていたな…。

そんなことを考えていると、秋兄が再び口を開いた。

「…なぁ、愁」

「だから、話は後やって…」

「その事じゃないわい、ド阿保。春美のことなんじゃが…記憶が戻るまで、家に置いたらどうじゃ」

「――えっ？」

秋兄の提案に、驚いて声が裏返ってしまった。

「そうじゃな、ええ考えかもしれん！春美、そうせぇよ」

愁は真剣な面持ちから一転して顔を輝かせた。大賛成のようである。

「私も、ええ考えやと思うよ！」

ハルも秋兄の意見に賛成した。

「…えーと…。」

一瞬、戸惑った。迷惑になるに決まっている。

しかし、今私が頼れるのは、愁やハルや秋兄しかいない。そして――何となく、愁の傍にいると、闇に消えた記憶を取り戻せる。そ

んな気がしていて。

「…本当に、迷惑じゃない？」

心配でたまらず愁に聞いてみると、愁は思い切り首を横に振った。

「迷惑もなんもないわ！家は男所帯じゃけん、春美がいてくれると華があってええじゃろ。大歓迎じゃ！」

「…うん、ありがとう。」

こうして私は、愁の家に居候させてもらうことになったのだった。

〔Ｓｃｅｎｅ．２　ＥＮＤ〕

Scene. 3

〔 Scene. 3 〕

「ただいまァ」

家の玄関の戸を開けるなり、愁が大声で言った。その声に、一人の男の人がひょこっと顔を出した。

「おうおう、お前ら。遅かったな、何しとったんじゃ」

「すまねぇな、親父。色々あってさ」

秋兄が言った。どうやらこの男の人は、愁や秋兄の父親のようである。

秋兄が愁を振り返って目配せをし、合図を受けた愁は小さく頷いてみせた。

「親父。コイツしばらく、家においてやってくれんか？」

後ろにいた私を、愁が前へくるように促した。愁達の父親は前に出てきた私を上から下まで眺め、首を傾げる。

「…そりゃまた、何で？」

「理由話すと長くなるんじゃがな。とりあえず、おいてやってくれ」

愁が一歩前に出て、懇願した。

「俺からも頼みます」

秋兄が頭を下げたので、それに倣って私も頭を下げた。

「まぁ、家におく分には全く問題ないんじゃが」

おじさんはそこで一旦言葉を切った。私が頭を上げると、おじさんは私の瞳を真っ直ぐ見つめ、言った。

「理由はしっかりと説明してもらう。困っていることがあるんなら、ワシらに言うんじゃ。…ゆっくりでええから、な」

言い終えると、おじさんはニカッと笑った。歯を見せて笑う所が愁にそっくりだった。

「よっしゃ！親父、愛してるゥ」

愁は飛び上がって喜び、最後にはおじさんに抱きつくという始末。そんな愁に呆れ顔を向けていた秋兄だったが、安心したのか柔らかい笑みを浮かべると、事を承諾してくれた父親に頭を下げた。

「これで一先ず安心やな、春美」

秋兄の言葉に大きく頷き、私は言葉では言い表わせないほどの感謝の気持ちを覚えた。

「ありがとうございます…！私、春美っていいます。よろしくお願いします」

私はもう一度、深く頭を下げた。

†

「ほう…記憶がなぁ。そら、大変じゃな」

座敷に座り、私は自分自身が置かれている状況をおじさんに話して聞かせた。おじさんは難しそうな顔をして、考え込むような仕草をする。

「そうなんじゃ。だからオレ、春美の力になってやろうと思ってん」

愁の真剣な表情を見て、おじさんは目を細めて怪しく笑った。

「何じゃ何じゃ、いっちょ前に言いおって。お前みたいな青二才に何ができる？」

「ふんっ、ヨッボヨボのオヤジに言われたかないわい。若さで乗り越えてやる」

愁は力こぶをつくって見せた。

「青臭いヤツめ。せいぜい、春美に迷惑をかけんこったな。何かあったら遠慮なく言うんだぞ、春美」

おじさんのゴツゴツした大きな手で頭を撫でられた。乱暴なのに温かいその手の温度が、心に染み込んでいく。

「ありがとう、おじさん」

笑顔で御礼を言うと、おじさんは照れたように笑った。

「ええなぁ、娘ができた気分じゃ」

「いい歳してニヤけるな、クソ親父」

私の頭を撫でていたおじさんの手が、愁によって無理矢理払いのけられた。

「何じゃ、嫉妬しとるんか、愁」

秋兄は笑いながら、茶化すように言った。

「アホ」

愁はからかいに動じることなく、ピシャリと跳ね返した。

「さあさあ。堅っ苦しい話はここまでじゃ。飯にしよう、腹減ったじゃろ」

おじさんは満面の笑みで言い、立ち上がって台所へ行った。
おじさんの背中を見送りながら、一つの疑問が浮かび上がった。
私はそれを躊躇いなく言葉にする。

「お母さんは？お出かけしてるの？」

一瞬、二人の表情が少し曇ったように見えた。言ってしまってから、してはいけない質問だったことに気付いた。

「母ちゃんな、うん、おったよ。オレらがまだ小さい頃に、病気で死んでしまってな」

「ごめんっ、私…」

慌てて謝ると、愁はただ笑った。

少しだけ、寂しげに。

「ええんじゃ、そんな顔すんな。過ぎた事じゃ。今はあのクソ親父とクソ兄貴とで、楽しくやっとるけん」

「クソは余計じゃ、クソ弟の身分で」

愁は秋兄を無視して言葉を続ける。

「それに、今日からは春美もおるしな。だから、ホラ」

愁は握りこぶしを作り、私の頬に軽く押し当てた。

「春美が、そんな悲しい顔したらあかんて。オレらは大丈夫じゃ。女の子がそんな顔しとったら、男にモテなくなっちまうぞ？だからほれ、笑ってみい！」

「…愁のばか」

文句を言いながらも、自然と笑みがこぼれる。目の前にある愁のその笑顔に、心の中の霧が晴れていくような気がした。

「…強いね、愁は」

正直な言葉が、私の口から零れた。

「二人とも、本当に強いね」

二人の強さに、私はもう何度も助けられている。心の底から、そう感じた。

「ありがとう」

私が笑いかけると、二人は優しく微笑み返してくれた。
「ほれ、お前達も手伝え！飯抜きにするぞ！！」
おじさんの怒鳴り声が、台所から響いた。
「うわっ、そりゃ勘弁！」
愁は弾かれたように立ち上がり、大慌てで台所へ向かった。
†
「よーし、春美！」
夕飯後、おじさんの元気な声で名前を呼ばれた。
「はいっ！」
反射的に返事をすると、秋兄と愁が同時に吹き出した。
「その返事、まるで軍隊みたいやな」
「だって…」
ケラケラと笑う愁に、恥ずかしさで頬が熱くなるのを感じる。
「ハキハキしてて、ええ返事やないか。特に愁、春美を笑える立場やないじゃろ。お前も見習わんかい。…さて、春美にも、オレの写真の腕前を見せてやるけん。待っとれ」

そう言って立ち上がり、他の部屋へと向かうおじさんの背中は、どこか楽しそうに見えた。

「相変わらず強引やなぁ、親父は。子供の頃からあのまんまなんやろな」

自分の父親に向かって、まるで子供を見るような目を向ける秋兄。

「写真、って？」

何のことかわからずに隣にいた秋兄に尋ねたが、その答えは秋兄ではなく斜め前に座っていた愁から返ってきた。

「家、写真屋なんじゃ。言うとらんかったっけ？」

「うん、知らなかった！じゃあおじさんは写真家なんだ…すごい！」

思わず大きな声で叫んでしまった。すると奥の部屋から箱を抱えて戻ってきたおじさんが、自慢げに言った。

「そうじゃ、写真家じゃ。しかも腕前はピカイチじゃて、見てみい」

箱の蓋を開けると、その中のものが明らかになった。

「うわあ、すごい！これ全部、おじさんが撮った写真？」

「ああ。みんなみんな、オレが撮ったもんじゃ。ほれ、綺麗な景色じゃろ」

得意になって話すおじさんは、まるで子供のように楽しそうで、無邪気で。愁はその様子をあきれ顔で眺めながら、ため息混じりに言う。

「春美、いかんわ。あんま誉めるな。ジジイが図に乗る」
「じゃかあしい」

おじさんは色々な写真を、一枚残らず見せてくれた。山や川、街中の風景、楽しげに笑う街の子ども達、道端に咲く小さな花。

「――あ…」

ある一枚の写真を見たとき、無意識に声を上げてしまった。

「どうした、春美。変なもんが写っとるか？」

その写真は、街の景色だった。橋の上から撮ったものなのか、手前に橋の手摺りが写っている。家々の屋根が太陽に照らされ、その近くにはドーム型の大きな建物がある。白黒写真で色は定かではないのだが、それが夕刻であることに、不思議と確信があった。

「この景色、なんだか懐かしい…」

言いようのない感情が心を満たす。何故こんな気持ちになるのか、わからなかった。

「ここ、オレとお前が初めて会った場所やないか。だからとちがうか？」
「そう、なんだ…」
「…おいっ、春美？お前…何で泣いとるんじゃ？」

慌てふためく愁に、私は何のことかわからず首を傾げる。

「…？泣いてなんか…」

――泣いてなんかないよ。そう、言うつもりだった。

だが、頬は濡れていた。そしてまた一筋、涙が伝った。

「よくわかんない…けど、止まんない…」

次第に視界が滲んでいく。その涙に、自分自身もただただ混乱するばかり。

「…大丈夫、大丈夫じゃ。泣きたいなら泣きゃあええ」

大粒の涙を流す私の頭を、おじさんは優しく撫でてくれた。手の甲で涙を拭いながら見上げると、おじさんの優しい表情がそこにあった。

「……！」

涙は堰を切ったように溢れ出した。止めようにも止まらない。…止める術を、私は知らない。

「不安じゃな、春美…辛い目に遭うたな…。好きなだけ泣きゃあええ。じゃがな、覚えとけ。おじさんはいつでも、春美の味方になってやる」

「あり…が…っ…」

嗚咽に埋もれ、言葉にならなかった。こんなにもたくさんの感謝の気持ちが、私の心の中に溢れているのに。

しかしおじさんは理解したように大きく頷いて、包み込むように抱きしめてくれた。おじさんの広い胸を借りて、赤ん坊のように泣

きじゃくった。

「元気を出せ、な。ほらこれ、掘り出し物。」

そう言いながら、顔に意地悪な笑みを張り付けたおじさんが見せてくれたのは、まだ小さな二人の子どもの写真だった。

「あっ！！テメッ、変なもん見せんなっ！！」

愁が突然大声でツッコミを入れると、写真をおじさんの手からもぎ取って見えないように隠した。愁の顔は林檎のように真っ赤だった。

「もしかして今の写真……秋兄と、愁？」

よく見えなかったが、勘で言ってみる。すると愁はがっくりとうなだれた。図星のようである。

「…見られた」

「何で隠すの？」

「……」

愁は黙ったまま視線を逃がした。

「ああ、思い出した。あの写真か」

そして、秋兄がおじさんと同様に意地悪な笑みを浮かべながら耳打ちしてきた。

「えっ、泣いてたの？あの写真」

「秋兄、テメェ！変なこと吹き込むなっ」

愁が顔を赤く染めたまま、二度目のツッコミを入れた。

「本当の事じゃろが。なあ、親父？」

秋兄はおじさんに相槌を求める。おじさんはからかうような口調で、しかし懐かしそうに目を細めながら話す。

「ああ、そうじゃたな。オレのいらなくなったカメラの取合いで秋一に負けて、大泣きしてる時の写真じゃ」

「そうなんだ…」

愁に何となく目を向けると、さっきよりも真っ赤になっておじさんを睨んでいた。

〔Ｓｃｅｎｅ．３　ＥＮＤ〕

Scene. 4

〔Scene. 4〕

夕飯の後片付けの手伝いを終えて愁の部屋へ行ってみると、愁はまだ膨れっ面をして座り込んでいた。

「ここが、愁の部屋なんだ？」

話し掛けてみるが、返事はない。

「そんなに気にすることないよ、誰だって泣くことくらいあるよ？」

現に、私は理由もわからない涙を流したばかりなのだ。励ますつもりで言ったことだったのだが、それは愁に大きなため息をつかせる結果となった。

「…そんなんやない」

心持ち強い口調で言われ、私は押し黙ったまま愁を見つめることしかできなかった。拒絶されたような気がして、締め付けられるように胸が痛んだ。

「あの写真を撮られた時、別にカメラが欲しいわけやなかったんじゃ。」

しばらく続いた沈黙を破るように、愁が口を開いた。愁の言葉に顔を上げると、自嘲気味に笑う愁の横顔が目に入った。

「…あの頃は、ガキじゃった。」
「…愁は、今もだと思う」

子供っぽい愁の行動ばかりが印象に残っていたせいか、思わず口を衝いて出た言葉。愁の表情は見る見るうちに憮然としたものに変化していく。

「…話、しなくていいですか。」
「いえいえ、是非ともお願いします。」

愁と話していると、心がふわりと浮かび上がったような感覚を覚える。こんな他愛ないやりとりが、安らぎを与えてくれる。

「人の話聞かんと、もっぺん話せなんて言っても話さんからな。一回きりじゃ」
「うん、わかった」

それでも愁はまだほんの少しだけ躊躇いがあったようで、しばらく口を開こうとはしなかった。私は愁が話してくれるまでいつまでも待とうと、そう思った。
やがて愁は決心したのか、ポツリポツリと語り始めた。

「オレは写真が好きじゃった。親父の仕事でもあったし、昔から馴染みがあったけん…オレと同じ環境で育った秋兄も、もちろんな。」

一旦そこで止めて、フッとため息をつく。

「…あの日親父は、念願の新しいカメラを買ってきてな。そしていらなくなった古いカメラを、オレか秋兄のどちらかに譲ると言った。

秋兄は喜んでカメラを欲しがった。けどオレは、秋兄ほどカメラを欲しがりはせんかったんじゃ。秋兄が欲しいなら、諦めようと思ったからな。その時、親父は言ったんじゃ。」

「……何て、言ったの？」

思いつめるように俯き膝に置かれた握り拳を見つめる愁に、思わず問い掛けた。

「――やっぱり、この写真屋を継ぐ長男の秋一にやるべきじゃな、と。」

「秋兄に…？」

「そうじゃ。だが、オレは……本当は、大好きな親父の写真屋を継ぎたかった。大好きな写真と共に、人生を歩みたかった。…だからオレは、思ったんじゃ。秋兄がカメラをもらってしまったら、オレは写真屋を継がせてもらえない、と」

膝のうえで握られた手が、筋が浮かぶほどに握り締められる。

「バカじゃったな、オレは。長男が家を継ぐことなんて、当たり前の事なのに。あの頃のオレは、本当に…とんだ阿呆じゃったなあ」

目を閉じながら愁は言った。瞼の裏に昔の幼い自分を思い描いているのだろう、自嘲気味に笑って言葉を切った。

「愁…。」

かける言葉が見つからず、いたたまれなかった。私は下唇を噛んだまま、俯いた。

「…やっぱ、いかんな、こんな話」

愁は両の手で頬をぴしゃりと叩き、笑顔を見せた。
「もう、ええんじゃ。諦めた事じゃけん」
愁のその言葉が嘘であるということに、なんとなく気付いた。笑顔が、すごく辛そうだったから。
その時頭の中に、ハルの言葉が浮かんだ。
――辛いときは、無理して笑ったりしたらあかんの……――
「愁が悲しいと、私も悲しくなるよ」
「……何や、それ。変な事言うヤツじゃな、お前は」
「…思ったことを言っただけ」
恥ずかしくなってきて視線を逃がすと、愁が小さく笑いながら言った。
「ありがとうな、春美」
愁は少し俯き、長く息を吐き出す。そして顔をあげると、もとの明るい笑顔だった。
「おい、お前達。もう風呂に入らんと！」
話を終えるとタイミングよく襖が開き、秋兄が言った。
「…春美は疲れたじゃろが？はよ入って、休め」
「うん、わかったよ。ありがとう、秋兄」

素直に頷き、秋兄の気遣いに御礼を言った。

「よっしゃ！春美に一番風呂、譲ったる」

愁がヤケクソとも取れる具合いに声を張り上げ、勢いよく立ち上がった。

「え、一番風呂って愁のだったの？」

愁に続いて立ち上がりながら疑うような視線を投げつけてやると、愁は私の肩をバンバンと豪快に叩く。

「んなことは気になさんな。とりあえず、今日は春美が先じゃ。疲れてるじゃろうし、な？」

愁は、ニカッと笑った。

「ありがとう、愁。」

愁の笑顔が、不安な気持ちを消し去ってくれる。…本当に、愁と秋兄とおじさんと、ハルのおかげでこんなにも笑えているのだと、心の底からそう思った。

†

沸かしたてのお風呂の湯は、少し熱く感じられた。それでもお湯は体のの疲れや、また心の奥底の不安を、優しく包み込んで消し去ってくれた。

「お風呂、好きだなぁ…」

誰に言うでもなく、小さく呟いた。やわらかくて温かな湯気が、頬を優しく撫でた。

（お風呂って不思議だなぁ…嫌な気持ちとか、みんな取り去ってくれるんだもん）

そんなことを、頭の片隅で考えていた、丁度その時――。

――ガラッ

勢いよく戸が開け放たれ、無邪気な笑顔がひょっこりと現れた。

「春美っ！湯加減はどう……」

ほんの一瞬の出来事だった。

「…きっ――！！」

愁の言葉は、耳をつんざくような悲鳴に掻き消されてしまった。

†

「いやあ…その、すまんな。何せ男所帯じゃけん…ちと、非常識なやつで。ほら、お前も頭下げんかいっ！」

おじさんが愁の肩を乱暴に肘で小突く。

「あたっ…！…ご…ごめん…」

痛みに顔を歪めながらも、渋々といった様子で謝る愁。
「いや、あの…いいんです。平気ですから…」
慌てて言うと、秋兄が苦笑いをした。
「平気なわけないじゃろ、春美。ごめんな、バカ弟が」
「…バカ兄貴…」
「へらず口を閉じろ、この阿呆め」
愁の悪態に、秋兄は愁の頭を軽く小突いた。
「ちっとは反省せい」
「ってぇ…」
「…春美は、もう寝ろ。ゆっくり休め」
「あ、はい。ありがとう…」
平気だとは言ったけれど、やはり恥ずかしい気持ちがあり、愁とは目を合わせることができなかった。
「おやすみなさい」
そう言い、私は逃げるように居間を出た。
〔Ｓｃｅｎｅ．４　ＥＮＤ〕

Scene. 5

戦争には
男も女も大人も子供も
何も関係ない

ただ人々は武器を手に取り
同じ人間にそれを向ける

〔Scene. 5〕

差し込んでくる陽射しが眩しくて、目が覚めた。目を開けてまず目に入ってきたのは天井、ゆっくりと起き上がって辺りを見回す。

（…ここ、どこだっけ…？）

考えるより先に、そんな言葉が頭の中に浮かんできた。…夢見心地。今の私はまさに、そんな状態だった。

昨日の出来事を思い出したのは、それからしばらく経ってからだった。静か過ぎる部屋の空気が、耳に痛い。

「……」

これから、どうしたらいいのだろう。考えたくもないのに、頭に浮かんでくるのは負の感情ばかり。もし、帰る場所が見つからなかったらどうしよう。…もしこのまま、記憶が戻らなかったら？

「こんな風に考えてばっかじゃ、だめだ…」

頭から暗い考えを振払い、起き上がって布団をしまった。それから着替えを済ませ、居間を覗いてみた。

居間にいたのは秋兄一人だけで、秋兄は新聞を広げて読んでいるところだった。新聞を読み進めている秋兄は、わずかに厳しい表情を浮かべていた。話しかけるべきか迷っていると、秋兄がこちらに気付いた。

「あれ、春美やないか。早いな、おはよう」

「秋兄。おはよう。愁とおじさんは？」

「まだ寝とる。いつも寝坊なんじゃ、あの二人は」

秋兄は呆れ顔で肩をすくめる。私は自然に笑みがこぼれた。

「私、起こしてきていい？」

「ああ、頼む」

「うん」

秋兄の許可を得た後、二人の寝室を教えてもらった。まずはおじさんを起こそうと、部屋へと向かった。

†

「おじさん。」

襖を開け呼びかけてみたが、起きる気配は全くなかった。

「おじさん、おじさん。もう朝だよ。」

ゆさゆさと揺すりながら声をかけてみても、やはり同じことだった。

「さて、どうしようか…」

しばらく考えた結果、強行手段を取るという結論にたどり着いた。

「起きないおじさんが悪いんだよね、うん」

とりあえず自分を正当化させ、これは寝坊をしているおじさんを起こすための手段なのであって、単なる悪戯などではないのだと自分自身に言い聞かせる。

深呼吸をしてから、息を肺いっぱいに吸い込んだ。

「お――じ――さぁーん！！！」

耳元で思い切り声を張り上げた。

「これなら起きるよね…？」

肩で息をしながら期待の色を瞳に浮かべ、おじさんの様子を確認

する。だがそんな期待も虚しく、おじさんは身動き一つせずにまだ寝息をたてていた。

「…起きない…何で？」

半ば驚きつつ、ぐったりとした気分で呟いたその時。おじさんの目が少しだけ開き、大きな欠伸をしながら私を見た。

「…あれ、春美やないか。起こしに来てくれたんかいな」

おじさんはむくりと起き上がると、嬉しそうに笑った。

「…ところで、さっき何か言っとったか？」

頭を掻きながらそう言うと、おじさんは思い出したように両耳から何か小さな物を取り出した。

「あーっ！耳栓！！」

それをみて、思わず叫んでしまった。

…してやられた。どうりで起きないわけである。悔しくて堪らなかったが、気を取り直して立ちあがった。わけもわからず目をぱちくりさせているおじさんを置いて、愁を起こすために部屋をあとにした。

†

音をたてないように、そっと襖を開けた。

「…さて、どうやって起こそうか」

親が親なら子も子、愁もまた耳栓をしている可能性も充分にある。どうしたものかと考えを巡らせながら、とりあえずと愁の寝顔を観察してみる。

「…愁って……寝顔も子供っぽいなぁ」

「……“も”って何や。」

「――えっ！？」

私は思わず飛び上がった。同時に愁の目がパッチリと開いて私を捕らえた。

「愁、起きてたの？」

「まぁな。」

「まぁな、って…」

「そもそも、朝っぱらからあんなでっかい叫び声が聞こえてきたら、誰だって飛び起きるじゃろうなあ」

私は自分の行動を改めて後悔した。愁の寝ていた部屋はおじさんの寝ていた部屋の隣で、つまりあれだけの声量で叫べば、その声は愁の部屋にももちろん聞こえていたということになる。

「だって、耳栓してるなんて思ってもみなかったから」

「ああ。あのオッサンな、寝るときは必ず耳栓しとるんじゃ」

「もっと早く教えてくれれば良かったのに」

私が口を尖らせながら言うと、愁は苦笑する。

「無理言うな、こんなこと誰が予想できるん？親父は元々は写真撮

るときだけ、目に見える景色に集中したいから言うて耳栓しとったんやけど…今はあれやな、立派な耳栓中毒者やなオッサンは」
「へえ……素敵だね、おじさん。やっぱり立派な写真家なんだね」

普段はふざけているように見えていても、写真を撮るときは被写体である景色と真正面から向き合う。そんなおじさんの姿を、私は見てみたいと思った。

「…というわけじゃ春美、残念やったな。作戦失敗や。まったく、人の寝顔覗きに来るなんて悪趣味やなぁ、春美は」

勝ち誇ったような笑みを浮かべながら愁が言った。私はただただ悔しいばかりで、八つ当たり気味に言い捨てた。

「…女の子のお風呂覗くのも、悪趣味でしょ」
「…あれは…っ」

愁が真っ赤になって視線を泳がせた。愁の反応に、話題を出してしまった私自身も恥ずかしくなってしまい、朱に染まった顔を隠すように俯いた。

「…あれは、ごめん…。あ…あのさ、お前…春美のとこの方がええじゃろ。女同士やし…気が楽じゃろ？」
「…そう、かな」

その方が、愁も良いのかもしれない。

「…じゃ、オレから頼んでやるよ」
「うん、ありがとう…じゃあそろそろ、起きてくださいな」
「はい、はい」

愁は欠伸をすると、もぞもぞと布団から起き上がった。

〔Ｓｃｅｎｅ．５　ＥＮＤ〕

Scene．6

〔 Scene．6 〕

「それじゃあ、行ってきます」

支度を終えた秋兄が玄関に立ち、居間にいた私たちに向かって声をかけた。

「いってらっしゃい、秋兄」
「おう、行ってこい！」

私の声とおじさんの元気な声とに見送られ、秋兄は出かけていった。

「うわっ、もうこんな時間やないか！」

愁は大慌てで残ったご飯を流し込むように胃に入れると、バタバタと足音を立てて居間から出ていった。

「慌ただしいやつじゃなあ、全く」

走っていく愁の後ろ姿に目をやりながら、おじさんは苦笑する。呆れたような口振りで呟いたおじさんに、私は問い掛けた。

「秋兄も愁も、一体どこに行くの？」
「ああ。二人はな、学校へ行っとるんじゃ」
「そっか、学校か…秋兄、きっと優秀なんだろうなぁ」
「まあ、愁よりゃ優秀ってのは確かじゃな」

「見た目どおり、だね」

小さく笑い声をもらしたその時、後ろから頭を鷲掴みにされた。驚いて振り返ろうとするが、ガッシリと押さえつけられていて動かすことが出来ない。

「ずいぶんな言いようやなあ？人がおらんとこで」

「…あ、愁」

「オレはな、運動専門なんじゃ。そこ間違えんといて」

「それって、ただの言い訳なんじゃ…わっ！」

小さく呟いて、愁に片手で頭を乱暴にかき回された。おかげで髪の毛がくしゃくしゃになってしまった。

「聞こえとるで、春美ちゃん」

「地獄耳だなぁ…」

「褒め言葉じゃ」

私は手で髪を直しながら愁に非難の目を向けたが、愁は全く取り合わない。

「秋一は文武両道やけどなあ、愁？」

愁を半眼で見つめながら言うおじさんは、愁より何倍も上手だった。

「ほっとけ」

そんな様子を眺めながら、私は心中でこっそり笑うのだった。

「ほれほれ、お前の負けじゃて。諦めてはよう行かんかい」

むくれ顔でおじさんを睨みつけていた愁を急かすように、おじさんは言った。

「うわ、遅刻する！遅れたら兵隊さんから大目玉食らっちまう」

愁は大慌てで、カバンを肩に掛け直しながら玄関へと走る。

「じゃ、行ってきます！」

元気な声でそう言って、愁は物凄い勢いで走って行ってしまった。そのスピードに、私はただ呆気に取られるばかり。愁に手を引かれていたとはいえ、昨日は自分もあのスピードで走っていたのかと考えると、少しだけ感動を覚えた。残念ながらその時は、走るスピードを気にしている余裕など全く無かったのだが。

「今度もう一回、手を引いて走ってもらおう」

「何のことじゃ、そりゃ」

独り言のように呟いた私に、おじさんは可笑しそうに笑い声を漏らした。

「…そういえば、愁の言っていた“兵隊さんから大目玉食らう”って、一体…？学校には、兵隊がいるの？」

「まあ、そんなとこじゃな」

「それは、なぜ？」

私が問うと、おじさんは少しだけ表情を曇らせた。しかし、私の問いかけから逃げようとしたり、話を逸らしたりはしなかった。ま

っすぐに私の目を心を見据え、語りかけるように答えた。

「今、この国が戦争中じゃということは、お前も昨日わかったじゃろ」

私は無言で頷く。

「戦争というのはな、武器と武器で人と人とが殺し合う、そういうものなんじゃ。そして兵隊さんがた…日本軍は、たくさんの武器を必要としとる。大人たちの手では作りきれんほど、たくさんの武器をな」

おじさんはため息をついた。諦めのような感情を、その表情に浮かべて。

「今の学校は、子どもたちが学ぶ場所でなくなってしまった。武器を作るために、子どもたちが働く場所となってしまった」

「子どもが、武器を…？」

「戦争は、人を選ばんからなあ」

おじさんはそう言って、その大きな手のひらを私の頭の上に乗せた。

†

「…あ、いかん。弁当忘れとるわ、愁のヤツ」

おじさんが盛大なため息をつきながら、四角い箱のようなものを手に持ちながら台所からやってきた。

「届けにいかんとな。全く、しょうもないヤツじゃ」
「忘れものなら、私が届けに行って来ます」
そう言った私に向かって、おじさんは少しだけ困ったような顔をする。
「そんなこと言うてもなあ。春美を一人で街に出すのは、ワシも心配じゃからな」
「おじさん、子ども扱いしてる…」
私が頬を膨らませながら軽くおじさんを睨むと、おじさんは笑いを堪えるようにしながら私の頭をポンポンと撫でた。
「娘を持った父親は、誰でもこうなってしまうもんじゃて」
いつからおじさんの子どもに？という疑問が浮かぶよりも先に、嬉しさがこみ上げてくる。なんと言って良いのかわからなくて黙り込んでしまった私に、おじさんは頭を撫でながら言って豪快に笑った。
「…春美はもう、ワシの娘と同じじゃ」
「……うん」
その一言を発するだけで、精一杯だった。
「おはようございまーす」
玄関先から明るい声がかかった。
「お客さん？」

私が尋ねると、おじさんは首をかしげる。
「まさかなぁ…こんな朝っぱらから？」
玄関に向かうおじさんの後をついて歩く。居間の戸から顔だけを覗かせて、私は玄関の様子を見守ることにした。
郵便やさんだろうか、重そうな鞄を肩に掛けた若い男の人が笑みを浮かべながら立っていた。
「おめでとうございます！」
何やら赤いものがおじさんに手渡される。
「…？」
（なんだろう、手紙かな？）
様子を窺っているうちに身を乗り出してしまっていて、おじさんと目が合ってしまった。
「あ…。えっと、手紙、ですか？」
変なところを見られてしまい、顔に熱が集まるのがわかる。ごまかすように話しかけると、おじさんは我に返ったように赤い届け物に目を落とすと、そのままそれをポケットに入れた。
「…春美。すまんが、やはり頼んでも平気か？愁の弁当配達」
「うん、大丈夫です。私が行ってきます」
「ああ、すまんな」

「うん」

私はちゃぶ台に置いてある四角い箱を手に取り、玄関へと戻る。
何となくおじさんと目を合わせづらくて、早足になってしまう。
靴を履き終えて玄関の戸に手を掛けた時。

「おい、春美」
「…はいっ？」

おじさんに呼ばれて、遠慮がちに振り返る。

「学校の場所、教えんで平気なんか？」

私は一瞬固まった後、ゆっくりと首を振る。

「春美も春美で、そそっかしいヤツじゃなあ。待っとれ。今、地図持ってきてやる」

おじさんは笑いながらそう言って居間へ行くと、一分も経たないうちに戻ってきた。

「ほれ。これを見ながら行けばすぐにわかるはずじゃ」
「うん、ありがとう」
「…じゃ、頼んだぞ。気ぃつけて行ってこい」
「うん。行ってきます、おじさん」

見送るおじさんの表情にわずかに違和感を覚えながら、私は学校へと向かった。

†

「ここが、学校か…」

たった一人で街を出歩くことは、私にとってはひどく心細いことだった。しかし何もしないでいれば、思考は勝手に暗いほうへと向かってしまってしまう。歩いていればまわりの景色へと意識が向くため、幾分か不安が和らいだ。

入口の門の影から顔だけを出すようにして、中の様子を窺う。複数の人々の声が、学校の敷地内から聞こえてきた。校舎の前に子どもたちが基側正しく並んでいて、手には長い棒のようなものが握られていた。

「構え！」

低く轟く男の声。その声を合図として、列の先頭に並んでいた人々が棒の先端を前方に向ける。

「やあー！！」

複数の叫び声と共に、棒を構えた人々は走り出した。その先にあるのは、わらで出来た人形のようなもの。走り出した人々は、棒の先端をその人形に突き刺した。

「次！構え！」

男の声に、人々は何度も同じ動きを繰り返す。小さい子どもも、大きい子どもも。武器を手に、人を殺めるために。

「…あの。どうしたんですか？」

「えっ」

背後から声が聞こえて、私は思わず飛び上がった。中の様子に気を取られていた私は、後ろから人が近づいてきていたことに全く気がつかなかった。

「そんなに驚くことはないだろ。学校に何か用事？女子は確か、工場に行ってるはずなんだけど」

そこにいたのは爽やかな印象の少年で、愁と同い年くらいの少年。しかし、愁とはどこか違った雰囲気を纏っている。

「いえ、違うんです。その…愁に用事があって」

「愁？」

「あ、すみません。榊愁って言う男の子で、私の知り合いなんですけど…ご存知ありませんよね」

「いや、知ってるよ。残念ながら、僕はあの悪ガキと親しい人間の一人なんだ」

そう言いながら、少年はゆっくりと笑みを見せた。

「愁なら今、訓練中なんだ。終わるまで抜けられないと思うよ」

「訓練中、ですか」

あの槍を構えた少年たちの中に、愁はいるのだ。

ほんの少し、胸が痛んだ。

「何か伝えたいことがあるんなら、僕から伝えるけど」

「いえ、そういうわけじゃないんです。ただ、愁の忘れ物を届けに来たんですけど…」

「忘れ物か。アイツはそそっかしいからなあ…でも、何で君が？」

少年に問われて、私は何と答えて良いのかわからなくて視線を泳がせる。

「詳しく話すと長くなってしまうんですけど…私、愁に助けてもらったんです」

「愁に？」

「はい。困っていた私を、愁の家で世話をしてくれているんです」

案の定、少年は驚いて目を見開いた。しかしすぐに表情を綻ばせて、笑い声を出した。

「へえ。まあ、愁のやりそうなことだな。アイツ、ただの阿呆に見えてもかなりのお人好しで、人一倍優しいヤツだから」

「はい。私、愁がいなかったら、今頃どうなってたか…」

昨日の、戦機が飛び交う空の下。あの時愁に出会っていなかったら。想像するだけで悪寒が走る。

「だから私、何か愁たち家族のために力になれたらなぁ、って。とは言っても私が出来る事なんて、こんな事しかないんですけど」

愁が忘れていったお弁当を目で示しながら、私は肩をすくめて見せた。

「その気持ちだけで、アイツには充分だよ。単純なヤツだから」

少年の言葉に、私は自然に笑みがこぼれる。

「でもまあ、アイツもアイツで色々あるからな…」

きっと無意識に出た言葉なのだろう。どこか遠くを見るような目を見せて、そう呟いた。

「ちょっと、あなたたち！」

背後からの怒声に、私と少年は勢いよく振り返る。

「げ、山下先生…」

少年がささやく様な声で、そう言った。

「何をやっとるの？女子はみな工場へ行っとるはずやないの！それに東條君、あんたも遅刻でしょう。早く行きなさい！」

「はいはい、今行きます！」

ほとんど逃げるように去っていく。しかし少し走ったところで、くるりと向きを変えて門の所へと戻ってきた。

「愁の忘れ物、僕から渡しておくよ。どうせ後で顔合わせるから」

「あ、ありがとう…」

「それと、僕の名前は東條遼太郎（トウジョウリョウタロウ）。また話せると良いね」

それだけ言って爽やかな笑みを見せると、背を向けて走っていってしまった。

「…さあ、あなたはこっちへきなさい！兵隊さんに何と言われるか…」

叱りつけるように言う女性を前に、私はすっかり混乱してしまっていた。乱暴に腕を引っ張られて、痛みに顔をゆがめる。今すぐにでもこの女性の手から逃れたかったが、一向に手を話す気配が見られない。

（…どうしよう…）

私の頭の中には、恐怖という二文字だけがぐるぐると巡っていた。

〔Ｓｃｅｎｅ．６　ＥＮＤ〕

Scene.7

〔Scene.7〕

薄暗い建物の中、たくさんの子どもたちが黙々と作業をしている。

「そこまで！これより30分間の休憩とする」

見張りと思われる兵隊の号令により、人々は汗を拭いながら作業場から離れた。油か何かだろうか、顔を真っ黒に汚しながら作業をしていた少女たちは、小さな手荷物を持ってそれぞれ昼食を取り始めた。

「おい、そこの者！」

突然怒鳴り声が響き渡り、私は息を飲んだ。険しい顔つきの兵隊が、こちらを睨みすえながら歩いてきた。

「汗の一つもかいていないとは…今まで何をやっていた？正直に答えろ！」

「あの、私は…」

「すみませんでした。私どもの不行き届きです。以後気をつけますから」

口を開きかけた私を遮るように、女性が前に進み出てきて頭を下げた。

「お前の話なんぞ聞いておらんわ！さてはお前…我々に逆らう非国民だな？」

脅しをかけるような声で詰め寄られて、私は恐怖ですっかり足がすくんでしまっていた。

「何とか言わんか！」

男の怒声と共に、左の頬に衝撃が走った。そのまま勢いよく地面に倒れこむ。何が起こったのか、理解するのにしばらく時間がかかった。

「ちょっと待ってください！」

押し黙ったまま動かない私と、それに対して怒りを露にする兵隊との間に、一人の少女が割って入った。

「この子は、私の知り合いなんです」

聞き覚えのある、凛とした声。

「何だ？お前も我々に逆らうつもりか」

「この子は、記憶を失っているんです。だから、働くのは難しいと思ったんです」

「何をたわけたことを。この非国民を捕らえろ！」

男の声が工場内に響きわたり、銃を構えた兵隊が二人のもへと集まってきた。ハルが私を庇うように寄り添ってきた。兵隊の手が、今にも二人を捕えようと迫ってきていた。

「兵隊さん、待ってください。この子らは私の生徒たちです」

「だから何だと言うんだ。我々にはこの工場の規律を乱す者を処罰

する権利がある」
「私にはこの子らを守る義務があります。すでに仕置きは済んだはずです。もう充分でしょう」
その女性は何人もの兵隊を目の前にしながらも、臆することなくひたすら頭を下げて頼み込んでいた。その様子を見ていたまわりの子どもたちがざわつき始める。兵隊を見る子どもたちの瞳には、侮蔑を含むような、そんな色が現れていた。
「ええい、もういい！見逃してやる、しかし今日だけだ。他の者達も覚えておけ。我々日本軍は、非国民に容赦はせん！」
男は私たちに一瞥をくれると、舌打ちをしてその場から離れていった。
「ハル、私…」
「春美、大丈夫？立てる？」
手を差し出して、私を立たせてくれた。
「ひどいことするよなあ。平気？」
先ほどあの兵隊に殴られた頬に、そっと触れられる。それまで感じなかった痛みが、じわりじわりと襲い掛かってきた。
「あなた、ごめんなさいね。嘉納さんの知り合いだったのねえ。あなた達の事情も知らないで、私ったら…」
すまなそうに謝ってくる先生に、私は首を横に振った。

「いいえ、気にしないでください。私の軽率な行動がいけなかったんです」
「山下先生は、私らを助けてくれたやないの。先生にはお礼を言わなきゃいかんな。ありがとう、先生」
「本当に、ありがとうございました」
私は深々と頭を下げた。

†

「まだ痛む？」
「ううん、もう大丈夫」
笑顔でそう答えると、ハルが私の顔を覗き込むようにして見つめてきた。
「ハル？」
「また無理しとるでしょ。まだ痛むんと違うの？」
「でも、さっきよりは痛みも引いたよ」
「あんたなあ…」
ハルが盛大なため息をつきながら、傷のある頬とは反対の頬を軽くつまんできた。
「辛いのを我慢するのはいかんって、前に言うたよな？それと同じ。…心配させんようにそう言うてるのはわかるけんな。何のために、人と人はおるんや」
頬にあった手を私の頭の上へと移動させる。

「…助け合うためやろ？」
「ハル…」
「いつまでも本当のこと言わんと、心が参ってしまう。そうやろ？」
「…ありがとう」

優しく微笑むハルに、私は笑みを返した。

「おーい、春美！お前、痣作ったんやってなあ。大丈夫か？」

どこからか声が聞こえて、私とハルは縁側へと出て外を見た。
愁だった。ひたすらに走って来たのか、二人のそばにたどり着いたときにはすっかり息が上がってしまっていた。

「何や、愁。もう学校は終わったんか？」
「ああ。学校終わって飛んできたんじゃ。怪我のこと、遼太郎に聞いてな。学校で山下先生から言われたらしいんじゃけん、何で遼太郎に言ったんじゃろうなあ…」

首をかしげて考え込む愁。私には一つだけ、思い当たることがあった。

「遼太郎ってもしかして、東條遼太郎くん？」
「へ、そうじゃけど…何で？」
「私、遼太郎くんと知り合いになったんだ。愁のお弁当を届けに行ったとき」

愁の顔が、見る見るうちに変わって行く。そしてしばらく眉をひそめながら考え込んでいたかと思うと、ため息を一つ吐いた。

「…アイツ、この事を言っておったんか」

「アイツって？」
「他に、何か言われなかったか？」
「他に…って、何の？」
「オレの事とか、忘れ物のこととか、それ以外のこと」
「…？特に何も。遼太郎くんの名前は聞いたけど、私の名前は言いそびれちゃったし…。また話せたら良いねって、それだけ」
「……遼太郎のヤツ…」
「遼太郎くんが、どうしたの？」

私は首をかしげながら問うが、愁はまた一つため息を吐いただけで何も言わなかった。

「それより、春美」

愁が近寄って来たと思うと、顔をまじまじと見つめられる。

「腫れとるなあ…全く。一体何があったんじゃ」

愁が呆れ顔で怪我をした頬に手を伸ばす。

「何があった、って言うわけでも……痛っ！」

愁が頬に触れた瞬間、鈍い痛みが走って思わず声を上げる。

「ちいっと痛むかもしれんけど我慢しとってな」

そう言うと愁は何やら緑の物体を取りだして、二つに折った。

「ほら、傷見せてみ」

言われるがままに傷のある頬を愁に向ける。
「いっ、いたっ！何で傷を押すの！」
「我慢じゃ、我慢」
愁に言われ、私はひたすら痛みを堪えた。何かをぐりぐりと押し付けられているような感触、それに加えて何やら草の匂いがする。
「愁、いたっ！…何やって…？」
「アロエじゃ」
「ア、アロエ？」
「そうじゃ」
愁が言うにはつまり、アロエの果肉を頬に擦りつけられているという事になる。
「…なぁ愁、アロエって痣にも効くん？」
「…わからん」
きっぱりと言い切った愁に、ハルは嘆息するしかなかった。
†
アロエの効果かどうかはわからないが、頬の痛みと腫れも大分引いてきていた。
「えっ！愁が春美のお風呂覗いてしまったん？」
「そうそう。何の前触れもなく、ドアが開いたと思ったら…」
高らかな笑い声が、辺りに響き渡る。ハルは笑いすぎて、うっす

らと涙まで浮かべていた。
「そ、それ傑作やー！面白すぎる…」
「…ハル。笑いすぎじゃ」
腹を抱えて大笑いするハルに刺すような視線を向けながら、愁は不機嫌丸出しの口調で言い捨てた。
「とんだ災難やね、春美。…で、春美を家においてやってほしいと？」
まだ笑いの余韻が残っているのか、苦しそうに呼吸をするハル。
「そうそう、それが本題。女同士の方がええかと思ってさ」
「うん、うちは全然構わへんよ。うちに来たらええ！」
ハルは笑顔で言った。

「――愁っ！」
「え、兄貴？」
愁が声のした方を振り返ると、秋兄が息を切らして走ってきたところだった。
「何しに来たん、そんなに慌てて」
「愁、これを見るんじゃ」
「は？何で…」

愁がいぶかしげな表情を浮かべて秋兄に聞き返すが、秋兄は表情を固めたまま何も言わずに愁に封筒を差しだした。
愁は釈然としない様子で首をかしげていたが、秋兄の手から封筒を受け取ると、中から紙を取り出して読み始めた。愁の顔から、次第に表情が消えていった。

「…徴兵…？」

感情のない声で呟く愁。

「まさか…そんな…！！」

ハルが悲鳴に似た声を上げ、唇を引き結んだ。

私には、理解することが出来なかった。

「…徴兵って…」
「…親父が…戦争へいくんじゃ」

秋兄の声からは、言葉には言い表せない様々な感情が込められているようで。表情に暗い影を落とした秋兄は、近くにあった木の幹を拳で叩いた。緑に茂った夏の木の葉が、さわさわとこすれ合って音を立てた。

「いやや…」

ハルが地面に膝をつき、しゃくりはじめた。秋兄は木の幹を睨みすえたまま動かない。
愁は、俯いたまま虚ろな瞳で地面を見つめているだけだった。

ふと、今朝の出来事が脳裏に思い起こされる。愁の家を訪れた郵便屋さん――手渡された封筒――それを隠したおじさん――そのときの、悲しそうな笑顔。

すべてが、繋がったような気がした。

「おじさんが、戦争へ…？」

誰に問うでもなく呟いた私の声は、風に吹かれて消えていった。

〔Ｓｃｅｎｅ．７　ＥＮＤ〕

Scene. 8

戦争へ行って
生きて帰ってきた人間なんて
一人たりともいなかった

みんなみんな
消えてしまったのだから

〔 Scene. 8 〕

「さあ、どんどん食うてくれ！」

おじさんは笑顔でごちそうを勧める。
並べられた二つのちゃぶ台の高さが違っているが、みな気にすることなく笑顔で食事をする。

「私らまで、失礼してもうて…ホンマすんませんなぁ」

ハルのお母さんが軽く頭を下げながら言った。

「おじさん、どれもおいしいよ！」

ハルが満面の笑みでそう言と、おじさんは歯を見せて笑った。

「そうじゃろ？写真の腕もそうじゃが、ワシの料理の腕もピカイチじゃけんな」

得意げに胸を張りながら髪をかき上げるおじさんのしぐさに、私とハルは小さく吹き出してしまい、おばさんまでもがクスクスと笑っていた。

「クソオヤジはすぐ、調子乗るからいかんな」

愁がもぐもぐと頬張りながら言うと、秋兄が拳で愁の頭を小突いた。

「口ん中に食いもん入れて喋るな、行儀悪い。」

「いってぇ…」

「大丈夫？今、すごく痛そうな音がしたね」

愁にとっては笑い事ではないのだが、込み上げてくる笑いを堪えることはできず。愁に半眼で睨まれる結果となった。

「春美、お前なあ…」

「…ご…ごめん」

「あんた、春美に偉そうに言えた義理じゃないやろ。なぁ？」
ハルが相槌を求めてきたので、必死に笑いを堪えながら頷いた。
「こらこら、春美さん。どういうことォ？」
愁がわざとらしい口調で言ってきたため、我慢の限界に達した私とハルは声を上げて笑った。三人のやり取りをそばで眺めていたハルのお母さんが、嬉しそうに目を細めて言う。
「あんたらはホンマ、仲良しやね。」
「春美とは昨日会ったばっかりやけど、すぐに打ち解けたんよ。」
春美がにっこりと屈託のない笑顔を向けてきて、私も自然と笑みがこぼれる。
「そうそう。こいつら本当、仲ええもん」
愁もまた笑みを浮かべ、ハルの言葉に大きく頷きながら言った。
「あら。愁君も充分仲良しやないの。ハルと、春美ちゃんと」
「そーか？おばちゃん、オレ、二人にいじめられとるんよ」
愁はわざとらしい泣き真似をして見せる。おばさんは可笑しそうに笑ったが、今度は愁が睨まれる番になった。
「そういう事言うんなら、もう愁なんか知らないから。ねっ、ハル」
「そうね、こんな阿呆は放っとこ」
「うそじゃ、うそ。冗談やって」

私とハルが冷たく言い放って顔を背けると、愁は慌てて謝ってきた。

「どうする、春美？」

「まあ、許してあげようかな」

同時に、ハルと私は笑い声を上げた。

「……ホンマに……――まるで、初めて逢ったんやないみたいや…」

おばさんが呟いた言葉が、私の心の中で静かに反響した。

「ふぅ…ごちそうさんです」

秋兄が箸を置きながら言った。

「オレも、食った食った」

愁もまたお腹をさすりながら、満足そうに呟いた。その隣で、おじさんの表情には次第に影が差していく。

「……さて、楽しい時間は、無常にも過ぎ去るもんやな」

おじさんの一言で、冷たく重い空気が辺りに満ちた。

「おいおい、何もそんなに黙るこたぁないじゃろ」

おじさんが軽い口調で言うが、誰一人として沈黙を破るものはいなかった。

「……みんなはもう知っておるじゃろうが、ワシは明日、軍隊に入らにゃいかんのじゃ」

みな、俯いていた顔を上げておじさんを見つめた。それぞれの瞳には様々な、それであって同じ気持ちが現れていた。

「……春美」

静かな声で名前を呼ばれて、私はおじさんの目を黙ったまま見つめ返す。

「頬の傷、兵隊さんにやられたんだとな。大丈夫か？」

私が小さく頷くと、おじさんはわずかに表情を和らげた。

「兵隊さんは、随分とひどいことをするもんじゃなあ」

おじさんの言葉には、どこか自嘲気味な色が含まれていて。

「ワシも、人を傷つけにゃいかんのかと思うとな…どうも、気を張っていられなくなりそうでなあ」

言葉を出せないのは、皆同じのようだった。誰一人として言葉を発しない中、おじさんは自らの感情をごまかすかのように明るい声で言った。

「今日は最後にみんなと飯が食えて、楽しく話せて、本当に良かったと思っとる」

「…待てや…」

愁が、ほとんど呟くような声で話しに割って入った。

「最後って…最後って、何？なぁ」

「……」

おじさんは黙ったまま。自分を真っ直ぐに見つめている愁の瞳から逃れるように、膝のうえに置かれた自分の握り拳に視線を落としていた。

「何で最後なんじゃ。まだ…最後なんかじゃない、戻ってくるじゃろ？」

愁がおじさんの肩を掴み、そして前後に揺さ振った。その瞳に、涙を溜めて。

「なぁ、なあっ！！絶対死なんで、生きて帰って――」

「…愁」

静かな、けれど強い口調で名前を呼ばれ、愁は肩を掴んでいた手を放した。

「…覚悟は、出来とる」

おじさんもまた瞳に涙を浮かべて、筋が浮いて見えるほど拳を強く握った。

「だからお前達も、覚悟を決めておけ」

おじさんは服の袖で涙を乱暴に拭い、秋兄と愁の頭をガシガシと撫でた。

…少し乱暴で、けれど優しい、父親の愛情表現。

「写真屋を、頼んだぞ」

最後かも、知れない言葉。

「――――戦争って、嫌じゃなぁ…」

人は何故、戦争に行くのか。

「幸せとは、何なんじゃろなあ」

何故、“戦争をしたくない人たち”が戦場へと赴くのだろう。

「今のままで在り続けることは、幸せとちがうんかな…」

おじさんの言葉が、空気に混じってはかなく散る。

おじさんも愁も秋兄も、おばさんもハルも。みんなみんな、泣いていた。悲しみを声に出すことはなく、ただ静かに頬に涙を伝わせて。嗚咽のみが、部屋に響いていた。

――耳が心が、痛くて堪らなかった。

†

「日本国、万歳！」
「日本国、万歳！万歳！ばんざーい！！」

翌日。巨大な船がある港が、戦場へと向かうおじさんとの別れの場だった。

「…ホンマに、すんません。息子達とそれから春美を、よろしゅうお願いします…」

おじさんは見送りに来たハルのお母さんに深々と頭を下げる。

「どうか、お気になさらないで下さい」

おばさんとおじさんは、互いに握手をかわした。

「それじゃあな。秋一、愁、春美、もうひとつ春美」

おじさんは、笑顔で言った。

「…元気でな」

――そして、私たちが再びおじさんに会うことは、二度と無かった。

†

おじさんが戦死したという知らせが届いたのは、徴兵から三日後だった。

――あまりにも早く、突然の死だった。

愁は、何も言わなかった。泣くことも、しなかった。ただ、感情のない瞳を星の輝く空に向けて。

「愁」

呼びかけるも、返事はない。

「ご飯だって、秋兄が呼んでるよ」

やはり返事がなく、沈黙が続く。

「……」

居心地が悪くて、これ以上何も言えなくなる。

ふと見ると、愁の背中が微かに震えているのがわかった。

「…愁…」

名前を呼ぶ以外、言葉が出なかった。

……何もできない。

何もしてあげられない。

自分がもどかしかった。

「…愁…」

体が動いた。まるで、引き付けられるように。

両の腕で、愁の震える体を抱きしめた。いつもよりも小さく頼りなく見える愁の背中が、苦しいくらいに胸を締め付けた。

「…悲しいときは、泣いて良いんだよ…」

ハルが、私にくれた言葉。二人に出会ってから私は、一体どれだけのものを二人から与えられたのだろう。

「泣いても良いんだよ」
「……っ」
愁は…愁だけは、泣いたっていい。でも、私が軽々しく流していい涙ではない。私は血が滲み出るほどに、下唇をきつく噛み締めた。
「オレ、弱いよなあ」
「充分強いよ、愁は」
震える背中を優しくさすった。
「しばらく、こうしとって…」
私の肩に頭を寄せ、愁は搾り出したような声で呟いた。
愁を抱きしめながら、そっと目を閉じる。
気付けば、それまで堪えていた感情があふれたように、涙が頬を伝っていた。
〔Ｓｃｅｎｅ．８　ＥＮＤ〕

Scene. 9

罪なき人の希望を命を
奪いに奪って
消し去ってゆく

人と人とが殺し合い
憎しみ合う

それが戦争

ならば一体
何のために？

〔Scene. 9.〕

「春美！今日、ええとこ連れてってやる」

翌日、朝食を終えるや否や愁が言った。愁はすっかり元気を取り

戻したようで、私は心中で安堵して胸をなでおろす。

「良い所、って？」

「まだ言わん」

愁はそう言って悪戯っぽく笑った。

「秋兄、秋兄！」

愁が玄関の戸口から家の中に向かって叫ぶと、秋兄が怪訝そうな表情を浮かべながら居間から出てきた。

「何じゃ、朝っぱらから騒々しい。」

「今日、ちっと遅くなるかもしれん。でもまだ、夕方まで時間あるなあ…とりあえず、ハルの家行ってくる」

「あんまり遅くなるなよ」

秋兄が念を押すように言った。

「わかっとるわい。じゃ、行ってくる」

「迷うなよ」

「迷うか、ドアホ。今まで何べん往復しとると思っとる。だてに長年ハルの幼なじみやっとらんからな」

「さて、どうだかなあ」

ムキになって言い返す愁に向かって、秋兄は馬鹿にしたような視線を投げた。

「まあ、気をつけていってこいよ。春美、愁を頼んだぞ」

「うん、任せて」

秋兄のからかいに応じ、私はそう言いながら秋兄に満面の笑みを浮かべて見せた。

「おうおう、そこまで言うなら面倒見てもらおうやないのォ」

小馬鹿にしたように半眼で見つめてくる愁に、私は小さく舌を出しながら言い放つ。

「しょうがないから、面倒見てあげる」

「アホゥ」

仕返しとばかりに、愁は私の髪の毛を思いっきりかき回してきた。

「わっ！」

「アホなことばっか言うてると、置いて行くぞ」

「愁のばかあ…」

せっかく整えた髪も、今の愁の悪戯ですっかり無残な状態になってしまっていた。これでは、朝の寝ぐせとの戦いも水の泡だ。ぐしゃぐしゃになった髪の毛を必死に直しながら、私は悔しさに下唇を噛んだ。

「春美、春美。置いてかれとるぞ」

「えっ？…あ！」

髪の毛を直すのに夢中になっていて、気付いたときには愁の背中はずいぶんと遠くの方に見えていた。

「秋兄、行ってきます！」

秋兄はゆっくり頷いて、優しい笑みを浮かべながら手を振ってくれた。

†

「ハルー。おるか？」

愁が大きな声で名前を呼ぶと、驚いた表情を浮かべながらハルが家の中から出てきた。

「あら、おはよう愁、春美。愁、今日はやけに早いやないの」

ハルは驚き、あげくの果てに愁が変なものでも食べたのではないかと疑ってかかる始末。

「そうそう。今日は寝起きも良かったんだよ。薄気味悪いね」

寝ぐせの恨みとばかりに言ってやると、愁は露骨に嫌な顔をしてきた。

「えぇい、オレかて早起きすることくらいあるわい」

拗ねたように口を尖らせる愁がおかしくて、自然と笑みがこぼれた。

「今日あの場所へ、春美を連れて行きたいんや」

愁が言うと、ハルもその言葉に賛成をしたように頷いた。

「ええね！そうしよう！」

二人の会話に、私はさらに首を捻るばかり。

「ねえ、“あの場所”って？」

「愁、春美に言うとらんかったの？」

「行ってからのお楽しみ」

歯を見せて笑う愁にハルは小さくため息を吐きながら言う。

「ま、そうゆう事にしてあげる」

「ずるい、二人だけで…」

「ええじゃろ、その内わかることじゃて。よし、決まり！いつもの時間でええよな？」

「うん、そうね。じゃあそれまで、家でお話でもしてようか、春美ちゃん」

ハルが私の右手を取りながら、にっこりと微笑む。私は微笑み返しながら頷いた。

「おいおい、オレは？」

「女の子同士の話するんやもん。男のアンタが出る幕はないの」

「差別じゃ…男尊女卑ならぬ女尊男卑じゃ」

ハルの素っ気ない態度に愁はすっかり拗ねてしまったのだった。

†

空の色が変わり始めた頃、三人はハルの家を出た。

草や木が生い茂る山の中を、ハルと愁はどんどんと進んでいく。

私は歩きにくい山道に手間取り、少々遅れ気味にあとに続いた。

「はあ…はあっ…」

人間どころか獣すらも通りそうにない山道。行く先行く先草が生い茂っているばかりで、まったく先が見えない。視界を遮るように高く伸びる草に、何度もハルと愁の背中を見失いそうになる。息を切らしながら、私は二人に追い付こうと必死になった。

そのうちに空はオレンジ色に染まり、辺りは暗くなり始める。

「…やばいな…急がんと間に合わん」

空を眺めてわずかに眉を潜めると、愁は歩くスピードをあげた。

「…えっ、待って…！」

もう疲れ切ってしまい、歩くのが辛い。

「春美…大丈夫？」

ハルが心配して寄って来てくれる。

「…ったくもう、情けないなぁお前は…ホラ」

愁が見兼ねたように寄って来て、手を差し出してきた。

「手、貸せ」

「…え」

「俺の手につかまれ」

「……」

ほんの一瞬、躊躇した。
今この手を掴んでしまったら、自分の心が自分のものでなくなってしまうような、不思議な感覚に囚われたから――。

「…ほら、はよ」

急かされたためか、そいでないのか、理由はよくわからない。まるで何かに引き寄せられるように、目の前に差し伸べられた手のひらにほとんど無意識のうちに自らの手が伸びる。わずかに触れるくらいの距離まで手を近付ければ、愁はその手を力強く握りしめた。

「…もうすぐそこじゃ、頑張ろ」

愁の背中を見つめながら歩く私の耳には、不規則な脈を打つ心音だけが大きく響いていた。

草木を掻き分けながら黙々と歩いていくと、やがて平坦な場所にたどり着いた。

「…何とか間に合ったな」

愁は額に滲んだ汗を拭いながら、高く伸びた草に手を掛ける。

「春美、よう見とって」

ハルが草を指差しながら言う。私は言われるがままに指差した方向に目を向ける。
愁の手によって視界を覆っていた草が掻き分けられると同時に、目の前が明るくなった。

「……っ！」

暗闇に慣れてしまっていた目には眩しすぎるその光に、私は思わず手で顔を覆う。

「そんなんやっておったら見えんじゃろ。見なきゃ損じゃて、早く見てみい」

愁はそう言って私の肩を支える。促されるままに、ゆっくりと腕を下ろしてみる。

「…う…わ…っ！！」

目の前の光景に思わず声を上げた。

「どうじゃ、言葉も出んじゃろ？」

言葉だけではなく、呼吸の仕方すらも忘れてしまいそうだった。目の前に広がる空には、紅に燃える太陽があった。

「これをお前に見せたかったんじゃ」

下に目を向ければ、どこまでも続く広島の街が一望できた。

「…きれい…」

「太陽ってのは、光が強すぎて直接見るには眩しいじゃろ」

愁の話に耳を傾けながらも、視線は真っ赤に燃える太陽に釘づけの状態。

「でもな、夕日は違うんじゃ。こうやって眺めとっても、ちっとも辛くない」

沈み行く夕日はどこか寂しげで、それでいて優しい。

「夕日はオレらに優しい光を浴びせて、優しい気持ちにさせてくれる。……そう、思わんか？」

そう。まるでそれは、たまに見せる寂しげな表情と、包み込むような深い優しさとを併せ持った一人の少年のような存在感。

「オレとハルと、今日からはお前もじゃな。3人だけの秘密じゃ」

柔らかな夕焼けの光を全身に浴びて、穏やかな笑みを浮かべながら。愁は歯を見せて笑いながら、そう言った。

「春美のことがよっぽど気に入ったんね、愁は」

「何じゃ、いきなり」

微笑みながらそう言ったハルに、愁は眉をひそめて怪訝そうにハルを見つめる。

「今まで何度もここに来とるけど、誰かに教えようなんて言い出したことなんかなかったもん」

愁は眉間の皺をさらに深くしながら、首を傾げる。

「そやな…何でやろなぁ？」

「変に秘密主義やからなぁ、このバカ」

ハルの言葉に私は小さく吹き出し、口を開く。

「大丈夫、安心して。私一人でここまで来るなんて絶対に無理だもん、誰にも教えられないよ」

正直、今歩いてきた道程を辿って無事に帰れる自信すらない。日暮れ時の薄暗い山の中であるため、尚更である。

「なんじゃ春美、えっらい方向音痴じゃなあ」

「人が歩くような道なんて無かったでしょ！」

方向も何もあったもんじゃない、と抗議の声を上げる私に対し、愁はケラケラと笑いこける。

「ほんっと、おもしろいヤツじゃなあ春美」

声を上げて笑い続ける愁を半眼で睨み付けながら、私は頬を膨らませた。

「人をおもしろがるなんて、失礼な…」

「ええ意味で、じゃ」

歯を見せながらニカッと笑う愁。

「…嬉しくない」

その笑顔に、心臓が不規則に高鳴るのを感じた。

すっかり日も暮れ、夜闇の中で唯一の光である月明りも木々に覆

われた山中にはとどかない。

「春美、大丈夫？」

「うん、なんとか…」

「迷わんように、しっかり付いてこいよ」

暗い山道でたよりになるのは、前方から聞こえてくるハルと愁の声だけ。

「愁…足下が見えんから気ぃ付けんと…」

「わかっとるて…あ、そこに木の根っこ」

愁が言った、まさにその瞬間。爪先をとられた私は見事にすっ転んだ。

「なっ、春美！何やっとる…ドジやなあ。立てるか？」

愁は寄ってくるなり呆れ顔で言い、手を貸そうと屈む。

「へ、平気だよこんなの…っ」

愁の助けを断り、地面に手をついてゆっくりと立ち上がろうとした瞬間、左足首に激痛が走った。

「…いっ…！」

突然の痛みに思わず声を上げそうになり、私は下唇を噛んで声を飲み込んだ。

「春美っ！大丈夫！？…」

ハルが近寄って来てしゃがみ、足の様子を見てくれる。
「…腫れてきてる…このまま歩いたら、もっと悪くなるかもしれん」
「すこしくらい…なら」
辛い痛みを堪え、心配させまいと笑顔を作って見せる。
「…そんな無理に笑ったりしたらいかん…前にも言うたじゃろ？」
「…ハル…」
ハルはこちらの腕を持ち上げて自分の肩にかける。
「私の肩、貸すから」
「オレもじゃ、…掴まれ」
「ごめん…。ありがとう…」
二人の肩を借りて片足だけで体を支えながら、暗い夜の森の中を歩き出した。
「春美、大丈夫？もうすぐやからな…」
「…うん」
ハルが励ますように言葉をかけてくれ、有り難く思った。
「……ドジっ子春美」
愁が言った。それでも、しっかりと体を支えてくれていた。
「…なぁ、春美。今日から家に来たらどう？私、春美ともっとおし

ゃべりしたいな」

ハルが顔を輝かせて言った。

「うちなら、どっかの誰かさんにお風呂覗かれる心配もないし」

「……そっか」

ハルの意地悪に、悪ノリしてみる。見ると、愁はバツが悪そうに視線を泳がせていた。

「そのネタ古いぞー、お二人さん」

愁は明後日の方向を見つめながら冗談を言った。

「決まり！楽しみじゃなぁ」

「うん」

ハルの嬉しそうな笑顔に、楽しみが膨らんだ。

「…着いた！家が見えてきたぞ……まずい」

愁の表情が引きつった。

「…ハルに春美、鬼が待ち構えとる…」

愁は観念したように小さくため息を吐くと、文字通り鬼のような形相で仁王立ちをしている秋兄の方へゆっくりと歩みを進めた。

「ごめんなさい」

ハルが頭を下げた。

「遅くなったうえに、春美に怪我までさせてしまって…」

「ハルのせいじゃないよ、私の不注意で転んだんだもん。本当に、心配かけてごめんなさい」

ハルに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。頭を下げると、秋兄がため息をつくのが聞こえた。

「…まったく…おい、愁！」

秋兄の呼びかけに、愁は黙って俯いたまま。

「返事くらいせい！大体、お前がついていながら」

「…わかっとる！」

愁が怒鳴った。

「オレかて、春美に怪我なんかさせとうなかったわい！」

愁と視線がぶつかったかと思えば、愁の頭が下げられる。

「ごめんな。痛かったよな」

「何で、愁が謝るの……」

愁の行動に戸惑い、どうしようもない気持ちになる。

「春美がドジなのもあるけど」

「お前なぁ…」

秋兄が呆れて口を開きかけたが、愁は言葉を続ける。

「――それでも、オレが守ってやりたかった」

「…！」

愁の言葉に、心臓が締め付けられるような感覚。

「…オレ、助けてもらってばっかやもんな」

付け足すように小さく呟くと、愁は自嘲気味に笑みを浮かべた。

〔Ｓｃｅｎｅ．９　ＥＮＤ〕

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5740a/

Ｎａｍｅ～戦火の中の呼び声～

2010年10月14日22時04分発行